

## はしがき

医療は、私たちの病気やケガを治すために必要不可欠な社会のケアの営みです。健康の回復は1人ひとりの人間の尊厳を保つことにつながります。医療には、この大切な役割があり、その担い手としての医療従事者（以下、医療者）には、高度な医療・看護の技術だけでなく患者さんの心と向き合い、その尊厳を保障するために高い人権意識と倫理観が求められます。一方、医療や看護の現状では、その原点にある人権や医療倫理の問題は、多くが自己流やフィードバックで済まされています。しかし、人権や倫理は、現実離れのむずかしいリクツではなく、患者さんと医療者との人間どうしの関係をどうしたら好ましい関係にできるかを導いてくれるものです。

この本は、そのために、人権や倫理のしくみについて、理論と実践のノウハウをわかりやすく解き明かします。人権や医療・看護の倫理感覚が身につくと、患者さんの権利擁護や自己決定などの治療手続の助けになるばかりか、医療者自身も、医療チーム間や患者さんとの対人関係の改善にも役立ち、結果として質の高い医療サービスが提供できることとなります。

その実現のためには、医療者の1人ひとりが法的理論（人権論）に裏打ちされた正確な人権の知識をもつことが必要です。また、医療の先行研究に基づく倫理観も欠かせません。本書は、従来の人権論や法学教育のレベルを超えて、さらに医療現場を意識しつつ、医療者が実際に直面する人権と倫理の問題に十分対応できるように構成されています。また、法学、医学、看護学等の連携した学際的な視点にも気配りをして書かれています。この本は、すべての医療者向けのものですが、特に、医療現場の難しい人権と倫理の問題をより具体的に分かりやすく紹介することで、医療・看護学を学ぶ学生およびベテランの実践者に活用していただくことを目的としています。

そのため本書は、それぞれの分野の第一線で仕事をする法学・社会福祉学の研究者2名、医師・生命倫理学の研究者2名、看護師・看護学の研究者3名、医療事故・医療訴訟に携わる弁護士1名の計8人の執筆者の学際的なチーム

ワークによって記述されています。また、人権や医療・看護倫理学習の初学者仕様にし、法律や倫理の用語をできるだけ平易にし、文体は「です・ます」調に統一しています。本書は、山本克司著『福祉に携わる人のための人権読本』（法律文化社、2009年）の姉妹編として企画されました。患者さんの福祉・権利擁護について学習する場合には、こちらをご参照ください。

次に、本書の内容を紹介します。

**1**では、人権の理論的な理解をしていただくため、人権の意義・歴史・内容や性質について、医療現場の具体例に沿って記述しています。

**2**は、患者と医療者の対人関係はどうしたら良好なものにできるか、など、医療・看護現場で役立つ倫理的アプローチの基本や、その実例の「患者の権利章典」について紹介しています。

**3**は、超高齢社会の影響下に、医療現場で問われる「老い」と「認知症」について医学的視点から記述しています。

**4**は、**2**の基本線をふまえて、さらに、医療の倫理的課題に対する具体的なさまざまなアプローチについて、それぞれ事例を示しながら解説しています。この2つの章を学習することで、臨床の倫理的問題に一定の解答が示せるように構成されています。

**5**は、医療現場で求められる看護倫理について、看護師に必要な倫理と歴史の知識、生命倫理と看護、看護師と医師やその他の医療者および患者さんとの関係、看護師の守秘義務の視点から記述しています。

**6**では、**5**の看護倫理の知識を前提として、看護師の倫理的課題を深めています。

**7**では、医療事故や医療訴訟を法学の視点から分かりやすく理論的に理解していただくことを目的に記述しています。

**8**では、医療現場に必要な医事法の問題点と現代社会で緊急の課題となっている感染症への対応について記述しています。

ケース・スタディ編は、**1**～**8**で学習した内容をより深めることを目的としています。ここでは、読者のみなさんに自ら考える力をつけていただくため、12のケースを掲載しています。ケース・スタディでは、1つの事例の医療

倫理の問題をさまざまなアプローチを使ったり、いろいろと選択肢をあれこれ考えたりしながら、一定の結論を導きだすといった、倫理トレーニングをすることを目的としています。

ちなみに、資料編の「看護者の倫理綱領」に関しては、目下、改訂作業が進められています（まもなく公表予定ですが、本書の刊行に間に合わせる形で文言を修正することができませんでした）。

医療・看護に従事するみなさんが、本書を通して人権や医療・看護倫理への理解を深め、質の高い医療サービスの提供が可能になること、また、それにより、患者さんという人間の尊厳が保障され、読者のみなさんご自身の自己実現に貢献できることを著者一同心より願っています。

最後になりますが、本書は、企画から刊行まで5年を要しました。この間、著者を温かく支え続けてくださった法律文化社の舟木和久さんに著者一同心よりお礼申し上げます。

2021年3月吉日

編者 村岡 潔  
山本克司